



ハイスペ絶倫巨根彼氏に
抱き潰される！
—体験版

がら堂 / どん丸

A t t e n t i o n

高校生を含む18歳未満は閲覧禁止です。

この話はフィクションです。実在の人物や団体とは一切関係がありません。

本書の内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます。

Unauthorized copying and replication of the contents of this book, text and images are strictly prohibited.

私は物心ついた時からすでに面食いだった。

母親もそうなので遺伝か英才教育だ。四六時中テレビをつけて雑誌を読んでイケメンを探してきやあきやあ言つて、そのまま気がついたら二十年近く経つていて、自分で稼いだお金をイケメンアイドルにつき込むようになっていた。

よく勘違いされるが、イケメンは観賞用つてわけじゃない。あわよくば付き合いたいし結婚したいと思つてる。強欲なので。

でも残念なことに私の顔は並なので、イケメンと付き合うのは難しいのである。一度奇跡を起こしてイケメンに告白してオツケーしてもらったことがあるのだが、浮気されて別れた。相手がイケメンといえど浮気は許せなかったのだ。相手は可愛い子だった。一ヶ月は泣き腫らして、推しアイドルのライブDVDを見まくつてなんと

か持ち直した。

そんなある日、隣の部屋に男の人が引っ越してきた。

少し癖のある黒髪にシャープなフェイスライン、スツと通った鼻筋、厚めの唇。羨ましいくらいバサバサのまつげに縁取られた瞳は暗いところだと真っ黒だけど光に当たると緑に光って、不思議な寶石のよう。身長はおそらく百八十半ばくらいで、服を着ていると細身に見えるけど多分脱いだらすごい。趣味・イケメンウオッチなのでわかる。

一瞬で落ちた私はもう耳に何も入ってこなかったが、声もイケボだったのだから彼の詳細を聞きとめることができた。

名前は宮里隼人。私より数個年上。詳しくは言わなかったけど多分自分で起業して社長やってる。社長云々はどうでもいい。とにかく

く顔。顔だ。我ながら酷い。

完璧に一目惚れをした私は、なんとかして彼の彼女になりたい、と必死だった。

「好きです！ 付き合ってください！」

「うん、いいよ」

一目惚れから一ヶ月後のことである。

朝や夕方、わざと彼と時間を合わせてマンションのエレベーターに乗ったりして関わりを増やし（ストーカーの気持ちがよくわかった）会話をよくするようになって、連絡先も交換して、「この辺の地理がわからない」という彼をいろんな場所に案内して（私にとっではデート）、私はもう彼のことを好きになる一方だった。

何気ない会話からようやく今フリーだと言うことを聞き出した私

は「この人は放置してたらすぐ他の女に持ってかれる！」と察して、勢いで告白した。友達に相談して色々案を練っていたけど、全く意味がなかった。中学生だってもっとマシな告白をする。

「……え？ あの、私が言ってるのは、彼氏になって欲しい、って意味で……」

「うん。俺もその意味でいいよって言った」

にこ、と微笑む隼人さん（彼と初めてデートしたときに意を決してそう呼んだら喜んでくれた）に私が何を返したかはいまだに思い出せない。

気がついたら自分の部屋にいて飲んだくれながら泣いていた。嬉しい方の飲んだくれ涙である。

それからは天国か楽園にいるかのような日々だった。

毎日好きって言うてくれる。かわいいって言うてくれる。抱きしめてくれる。キスしてくれる。

最初はドキドキすぎて頭が沸騰して半分死んでたかもしれない。でも毎日毎日してくれるから、だんだん私も慣れて行って、自分からもできるようになっていった。

デートではとにかく死ぬ気でおしゃれした。隼人さんみたいな超絶イケメンと並の私が並ぶのは周りから見たらちぐはぐだろう。恋人より兄妹の方が現実味がある。そんなのは嫌だったので、化粧から服装から何から、普段の数億倍頑張った。今までの人生でこんなに真面目におしゃれしなかった。そんな私を見た隼人さんにこりと笑ってかわいって言うてくれた。

私はこの頃、とにかく幸せだった。

「触ってもいい？」

「ひえ、は、は、はいっ」

「無理しなくてもいいよ。ダメならダメって言って」

「だめじゃない、です。わ、私も、あの、さわって、ほしいので……」

付き合いだしてからいくら経った頃。

隼人さんの家の隼人さんのベッドの上で、押し倒されてしまった。ここまで来るのにちゃんと手順を踏んでくれたことになんとかこう、もっと好きになった。好きが止まらない。

真剣な目の隼人さんに抗うことなんてできなくて、どもりながら必死で返事をする。多分顔は真っ赤だった。

処女じゃないのに処女みたいな反応をしまっているが、こん

なイケメン相手じゃ無理もない。自分で言うのもどうかと思うけど。隼人さんは私の返事に少し目元を緩めると、私の服の中に手を入れた。付き合いだした頃みたいにドキドキが止まらなくて死ぬかと思つた。

「ひあっ」

「かわいい」

「あ、やっ」

「かわいい」

顔中にキスを落としながら、隼人さんは大きな手のひらで私のお腹をゆっくりと撫でる。心臓のドキドキと、お腹のザワザワが相まって、頭がおかしくなりそうだった。

「脱がすよ」

「あっ」

「だめ？」

「あ、ううっ、い、いい、です……」

「ん。かわいい」

隼人さんはやっぱり顔中にキスしながら、私の服を脱がせた。ブラ一枚になってしまったのが恥ずかしくて身体の前で腕を交差すると、腕を掴まれてしまう。

「見せて」

「ん、んん、は、はずかしくて、」

「うん」

「それに、あの、そんなおつきく、ないし。げ、幻滅、するかも……」

付き合った時からずっと持っている不安——男受けするボンキュッポンの身体じゃない——を漏らすと、隼人は顔の位置をずらして私と目を合わせた。そして、私は隼人さんの緑色に光る目がいとも違うことに気がついた。いつもの優しい目とは違う。なんというのが正しいのか。欲に染まった、というのか。

剥き出しになった私のお腹を、隼人はまたゆっくりと撫でる。「いっぱい言ったよね？」

「ふあ」

「好きだって」

「ん、んんっ」

「信じてくれないの？」

耳元で囁かれ、自分でも驚くことに、それだけで身体がビクビクと反応してしまった。

「し、しんじる」

「うん」

絞り出すように言った言葉に隼人さんは本当に嬉しそうに笑って、私の腕を開かせた。私の腕にはもう力が入っていないかった。

「かわいい」

「あ、あんまり見ないで……」

「やだ」

「ひえ……」

「ブラ外すね」

「ま、まって、きやつ」

さつき私が答えるのを待ってくれていたのは何だったのか、隼人さんは背中とベッドの間にすつと手を差し込んできて、ブラのホックを外し、ブラジャーをするりと外してしまった。手慣れている。慌てて身体を隠そうとするけれど、腕をベッドに縫いつけられてしまつて動けない。

恥ずかしくて視線をうろつかせている私とは反対に、隼人さんは妙に座つた目で私を凝視していた。

「……………」

「は、隼人さん……？」

「……………かわいい」

「ひあっ！」

私の腕を掴んでいた手は胸に移動してきて、ふに、ふに♡と優

しく揉まれてしまう。

そりやあもう大人だし処女じゃないし押し倒された時点でこうなることはわかっていたけれど、想像以上に恥ずかしくて溜まらない。

そして、恥ずかしい以上に、隼人さんの大きくて硬くて熱い手のひらに、身体が過剰に反応してしまっていた。

「揉むと大きくなるんだって。これから毎日してあげるね」

「ひ、んっ、ま、毎日は、むりっ、あっ」

「なんで？ 俺は毎日こうしたいな」

「んんっ♡」

細くて女の人のようだと思っていたけれど筋張っていてゴツかった指先が先端に触れて、思わず鼻にかかった声を漏らしてしまう。

「ふふっ。ここ、気持ちいいの？」

「や、言わないでっ、んうっ♡」

「声かわいくなつてきてる。気持ちいいって、言ってる？」

「や、あっ♡ は、はずかしっ…んっ♡」

「ね、言ってる？ かわいいところ、いっぱい見たい」

私がこの声に弱いつて知っているに違いない。

「き、きもち、いいっ…んむっ♡」

目をぎゅつとつぶって意を決して言うのと、すぐ口を塞がれてしまった。もちろん隼人さんの口で。

入ってきた舌に口内をゆっくりと舐め上げられて、私は呼吸を忘れてしまう。ディープキスされたのが初めてってわけじゃないのに、なぜか、いつもと違って余裕がない。いつもないけど、ゼロだけど、今日はマイナス。

「んあ、ふ、ふ♡ んうっ♡ んーっ♡」

「ん……♡ そんなかわいいと、我慢できなくなるな……」

「ひえ」

唇を離れた隼人さんは、私の胸に顔を近づけると、そこにちゅっ♡ とキスをした。そのままぺろりとそこを舐められて、恥ずかしさと快感で頭が爆発しそうになる。

「あ、乳首勃ってきたね」

「い、言わないでっ……！」

「なんで？ かわいいのに」

「は、はずかしい、からっ！ あっ♡ それやっ……んうっ♡」

「そんなかわいい声してるのに、いやなの？」

「だ、だって、こんなのっ、んんっ♡」

「ほんとかわいい」

もう語彙がかわいいだけになってしまった隼人さんは、今度はぱくりと口に含んでしまう。ぬるついた生暖かい感覚にびくと腰が浮いて、私はシーツを掴んだ。

「ぢゆるっ、ちゅぷっ♡ れろお♡」

「だ、だめ、それ、んあ、ああっ♡」

必死にシーツに縋りつくように手に力を込めていると、隼人さんはその私の手を覆うように掴んできた。ふと視線を下へやると、隼人さんは私の胸の先端を口に含みながらぎらひらと光っているように見える瞳で私を見ていた。目が合うなり、その目は細められてまた愛おしそうに見つめられる。

「み、見ないで……」

「なんで？」

「はずかしいから、んあっ♡」

「恥ずかしがってるのもすっごいかわいい、好き」

「ひゃあっ♡」

べろりと強く吸われて、私の身体はビクビクと跳ねた。それを逃さないというように掴まれたままの手は更にベッドに押し付けられてしまう。

「こっち見て？」

「ん、あっ♡ やっ……」

「かわいい顔、見せてよ」

「ひ、ひえ……」

「お願い」

「う……」

そろそろと視線をずらしいくと、隼人さんは私の胸をちゅう♡と吸い上げながらこちらを見ていて、ばちつと目があったが、恥ずかしさに耐えられなくなって、私はぎゅつと目を瞑ってしまった。すると隼人さんの熱い吐息が耳にかかって、彼は耳元で囁いた。

「俺のことちゃんと見てくれないと寂しい。ねえ、名前呼んで？」

「ふあっ、んっ♡ んんんっ♡」

「ね、早く」

「んあっ♡ は、隼人、さ、んうっ♡」

「あー、かわいい……」

急に隼人さんは動きを止めて、片手で顔を覆ってしまった。それをぼかんと見つめていると、隼人さんは急に上体を起こして、自分

の服を脱ぎだした。

現れた隼人さんの素肌に垂れそうになった涎をなんとか耐える。着やせする方だったのか、隼人さんの身体は結構筋肉質で、私は思わず釘付けになってしまふ。なんというか、こう……眼福。

「はは、ちょっと気持ちが悪かったかも。そんな見られると、照れるな」

「ご、ごめんなさい」

「ふふ、好きなだけ見ていいよ」

くすりと笑った隼人さんは脱いだシャツを放り投げてから、カチャ、と音を立ててベルトに手をかけ始めた。やばい、今度は涎どころじゃなくて鼻血が出るかもしれない、と思わず鼻を抑えながら、隼人さんが下着姿になるのをじっと見つめた。我ながら気持ち悪い

ことはわかつていいるけど、言質は取ったし……。

「そんなに見られると、なんか興奮してきたな」

「ご、ごめんなさいっ！」

「責任取ってくれるよね？」

むしろ私が隼人さんに責任を取らせる側では？ と思いつつも、こくこくと頷くと、隼人さんは笑みを深め手を私のお腹をすりと撫でて、段々下へと這わせていった。

「へあっ、ちよ、そこは……」

「だめ？」

うっ、顔がいい……！ ずるい！ そんな風に言われて断れないことを知っているに違いない！

「だめじゃないです……」

「ふふ、ありがとう」

ちゅっ、と頬にキスをして、隼人さんは私のパンツに指をかけた。そしてゆっくりと下に下ろしていく。もう、どうにでもなれ！ と半ばヤケクソになって隼人さんを見つめると、彼は私に微笑みかけてくれた。

「おまんこ濡れてるね」

「言わないで……」

「可愛いよ」

「あ、そこ、んっ♡」

「乳首で感じちゃったのかな？ ちゃんとチンコ挿れる準備してる」

綺麗な顔から飛び出る卑猥な言葉に脳味噌が沸騰してしまいそうになる。

隼人さんは私の太ももの辺りにちゅっと音を立てて口づけると、そのまま顔を私の股に埋めてしまった。何をされるか察した私は慌てて隼人さんの頭を押さえつける。

「それは本当にダメ！」

「なんで？」

「だ、だって、汚いし！」

「え？」

「えっ？」

心底不思議そうな顔をする隼人さんにこっちが困惑してしまう。その間に隼人さんは私の両足を抱え上げると、ぬかるんだ秘部に舌を伸ばした。

「れろお……♡」

「ひゃっ?! だめ、あ、んあっ♡」

「ん、おいしい♡ れろ、ちゅ♡」

「あっ♡ そ、そこで喋らないで、や、んんっ♡」

「ぢゅっ、じゅるっ♡」

「ひゃ、あっ♡ あ、あっ♡」

びくんびくんと腰が跳ね上がるのに、隼人さんは足をしっかりと押さえつけて離してくれなかった。それどころか私の陰核をぐりゆくと押し潰してくるものだから、私は声を抑えることもできずにただ喘ぐしかなかった。

「あああっ♡ あっ♡ そ、そんなにした、ら…:…♡」

「きもひい? ぢゅるっ♡」

「しゃべ、ない、でえ♡ ん、ひあっ♡」

「れろろ♡ ふふ、かわいいなあ♡ ちゆる、ちゅっ♡」

「ああっ♡」

頭が真っ白になりかけた瞬間、隼人さんは口を離してしまった。中途半端に高められた身体を落ち着かせるように息を整えていると、隼人さんは私の足の間に座り直して、下着を下ろした。

ぶるんっ♡ と飛び出してきた彼の陰茎から思わず目を逸らしてしまう。とても綺麗な顔に似合わない、大きくグロテスクなソレは、既に臨戦態勢で血管を浮き立たせていた。これ、巨根ってやつでは

……。

「見て」

「ふあ……？」

「可愛すぎるから、チンコこんなになっちゃった」

「な、なっ……」

「これがおまんこの中に入るんだよ」

「い、言わないでっ……」

「ふふっ。とろとろになったおまんこにガチガチのチンコ挿れるの、気持ちいいだろうなあ……」

あまりにも卑猥な台詞に、膣がきゅんと締まったのがわかった。恥ずかしくて死にそうだというのに、隼人さんの言うことを想像すると期待で身体の奥が疼いて仕方がない。

隼人さんは私の両膝の裏を抱えると、亀頭を割れ目に擦り付けた。

「んあっ！♡」

「あー、すご、気持ちいい……♡」

「あ、あ♡ ま、まって、まってっ、ひあっ♡」

「当てるだけだから。一緒に気持ちよくなる？」

じんわりと汗をかいている隼人さんの肌から良い匂いが漂ってきて、頭の芯がくらくらする。私は必死で隼人さんにしがみついた。

「はは、ほんと、かわいいなあ……♡」

耳元で囁くように言われ、腰がぴくりと震えてしまう。すると、隼人さんはその私の腰を掴んで、ゆっくりと腰を動かし始めた。割れ目に硬いものがずりずりと当たる感覚が堪らない。

「はっ♡ おまんこ、熱くてとろとろだね……♡」

「い、言わないでっ♡ んんっ♡ こ、これ、あっ♡」

「あー、かわいいすぎる♡ チンコ、気持ちいい？♡」

「ふあっ♡ は、はずかしい、からっ♡」

「俺は気持ちいいよ？　ね？　言ってる？」

「ん、んんっ♡ き、き、きもち、いいっ……♡んむ♡」

「んちゅ、れる♡ ぐちゅ♡ はー、すき♡ ちゆる、くちゅ♡
かわい♡ ぢゆるる、ちゅっ♡」

ついに言ってしまうと、隼人さんは嬉しそうに笑って私の唇に吸い付いた。舌が絡み合うたびにお腹の奥が切なくなつて、自然とお尻が揺れてしまう。

「ん、ふう……♡」

「はあ、もつと動くね？」

「は、んん、やつ♡ ん、んんっ、ふう♡」

「くちゅ、ちゅう♡ れるろ、ぐちゅ♡」

キスをしながら、隼人さんは再び腰を振り始めた。今度はさつきよりも強く押し付けるように動かされて、秘裂から愛液が飛び散る

のを感じる。

「はあ♡ クリトリスも勃起させて、やらしいなあっ……♡」

「や、言わないで、んあっ♡」

「ほら、クリトリスにチンコ擦れて、気持ちいでしょ？」

「ひゃ、あっ♡ ん、んんっ♡ あんっ♡」

「気持ちいいよね？ おまんこぐちやぐちやにしてるもん♡」

「言わないでっ、て、ばあっ♡」

恥ずかしい言葉を口にされるたび、私の中はきゅんきゅんとうねる。それが隼人さんの陰茎にも伝わってしまったのか、隼人さんはとても機嫌良さそうに何度もリップ音を立てて私の顔中にリップ音を立ててキスを落とした。

「あ、んっ♡ はやとさ、んう♡」

「はあっ、ごめんね、もう我慢できないかも……」

「あっ♡ あ、あ♡」

「いれたい……っ♡」

耳元で吐息と一緒に余裕のない声で呟かれて、身体がぞくぞくと震えた。その瞬間に、今までで一番強い力で腰を打ち付けられ、陰核に陰茎が強く擦り付けられた。

「んあああっ！♡」

目の前が真っ白になるほどの快感が全身を駆け巡って、身体がびくんと跳ね上がる。

「はあ、はあ……♡」

「はは、まだ挿れてないのに、イっちゃったの？　かわいい♡」

「はあ、あ……」

絶頂の余韻に浸っていると、隼人さんは私の両足を抱え直した。そして器用にもどこから出したのかそのままコンドームを装着し、達したばかりでひくついている割れ目に先端をぐちゅ♡と突き立ててきた。

「あっ……♡」

「ね、挿れて、いい？」

ちらりと隼人さんを見上げると、顔を上気させて汗をかき、余裕のない表情をしている。そんな顔を見ただけで子宮がきゅんとして、早く欲しくなってしまう。

でも改めて視線を下にやると、隼人さんのものはとても大きくて、こんなに入るの？ と怯えてしまう。

その私の逡巡に気付いているのかいないのか、隼人さんは耐えか

ねたように私のそこにぐり、とそれを押し当ててきた。

「挿れるよ」

「え、まつ……あつ♡　そ、そんなの、はいんな……んんっ♡」

「おまんこ壊したらごめんね？　責任は取るから許して？」

「こ、こわすって……ひあっ!!♡」

私の返事を待たず、ずぷりとそれは侵入してきた。痛いというよりも、圧迫感がすごい。それに、熱い。火傷しそうなほど熱くて、硬いものが自分の中に入ってきているという事実には頭がクラクラする。

「く、うつ……♡キツっ……♡」

「ひっ、んっ、んあああっ♡」

「っ、は、力抜いて……♡」

「む、むりっ、むりっ……!!」

「大丈夫だから。ほら」

「んう♡」

無理矢理唇を奪われ、舌を差し込まれる。それと同時に胸も揉みしだかれ、乳首を摘まれた。それに合わせてお腹の奥が疼いて、力が抜けていく。

「ん、ふう……ちゅ♡」

「はー、すごい、きもちー……♡ おまんこに俺のチンコ入ってるの、わかるっ？」

「あ、んあっ♡ お、おっきいのっ、く、くるしっ……♡」

「うん、慣れようね♡ 君のおまんこは、俺のチンコ専用のハメ穴になったから♡ 最後までチンコ挿れて、おまんこを俺のチンコの

形にしようね♡」

「な、なん、言い方、ひっ！♡」

隼人さんの美声に全く似合わない隠語には、一生慣れる気がしない。しかしその言葉に私の身体は反応してしまっているので、どうにもならない。

「あ、ははっ♡ 締まった♡」

「や、あっ♡ あっ♡」

「ほら、ゆっくり動くから、ちゃんと感じて？」

製品版に続く

ハイスペ絶倫巨根彼氏に抱き潰される！_体験版

2022年4月26日発行

♡ どん丸／がら堂

♡ Twitter : @garadou18, @donmaru18